十二源氏袖鏡　五

特別
へ12
5001
5

源氏袖鏡巻五

十　あ

十一　みお

廿　よも

同　せま

へ12
5091
5

〈2001-071〉

源氏

十　的石

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ものうらうすけれ文六河もれなりすき
あけて第上

うら風やいふ吟ん切りひやら神うちぬ
所はまれきうつけ風いすうやまさう
海人ふ月のかりておおあまりうあうり
うに心かうもゆうなり源氏

海よまず神のうちけよかうすふ
やとあふさうへうる海つうちちうう
のうれまてあうまていうちかうり源
氏れたうまううらうふけぬう

わたまうあううう海のうたうはかいあを
おりきあよううをうりてうとうたうち
うみくいうらうう月所あくうかのうく
うちうあうもあうふあおうとせうる浪
はうもう氏第のうとうあけてうあれうく
うあうくう海ううこうはのみうこ
えはてなうくあうやうき有うう和はうう
はをうてひうきはうてのう仮名の和はう
ひきはうにうやああうけうはうれ
このうまふはうのうちにあうをかううはは

ともまうちんとすきてうちんあけの人
是八人も明一月のうちのきさらぎ
美せんらもまする花をひきまわるゆふ
みやみしまとさに称いるをはめもあ
てあるきるになるふるさたちつきやる
ほ毎よせて人三人ひさしのゆりをさ
て家わくうきよ紙よひあておれたる海の
こあるの入るより源氏のはむひまり
ようりゆのゆつ三月ゆるこの日れさく
あ月をあ紙ゆるの入るよ位うの称乃

ゆめたつをすあるすあるかあたるる
しみをん毎ようをひまうけくるるしたる海の
御へたてまれとるるうり　明石の美れけ
氏へひうるにゆ入れいちゆつの美れ中も
ちあ行ゆ事ちまいはをうるうんと御か
ゆうく山毎ちあしてはんのうへうりまり
をまて海にくのすうり　三月十ちを也くまひてるれ
るゆのまとへよもれあやきまてみゆる風
のゆなりゆうゆくうふやうよはるるきま
れぬあうゆ中事ちまりうつを紙日やうく

さしあてゝ
よもひのつゝんちして入るハせん位よりの神を
ゆくゝおもてをうち入道乃つやうしゝ
うしこの世ともおもくあうをさすつきなた
さ乃とまやおこるひをして後の世とこひを
まゝ人き山水のつたいいゝくたうをさて
こまのおこゝ水ハけ世のたくさつよ林のたの氏
りおさめのこゝ水ハけりひつむへきいれのこゝ町
ゝも所よつけてこゝあつゝこりむをめハたゝしか
よをこゝてけけゝ冥へのゝ乃こゝを海せこりかの

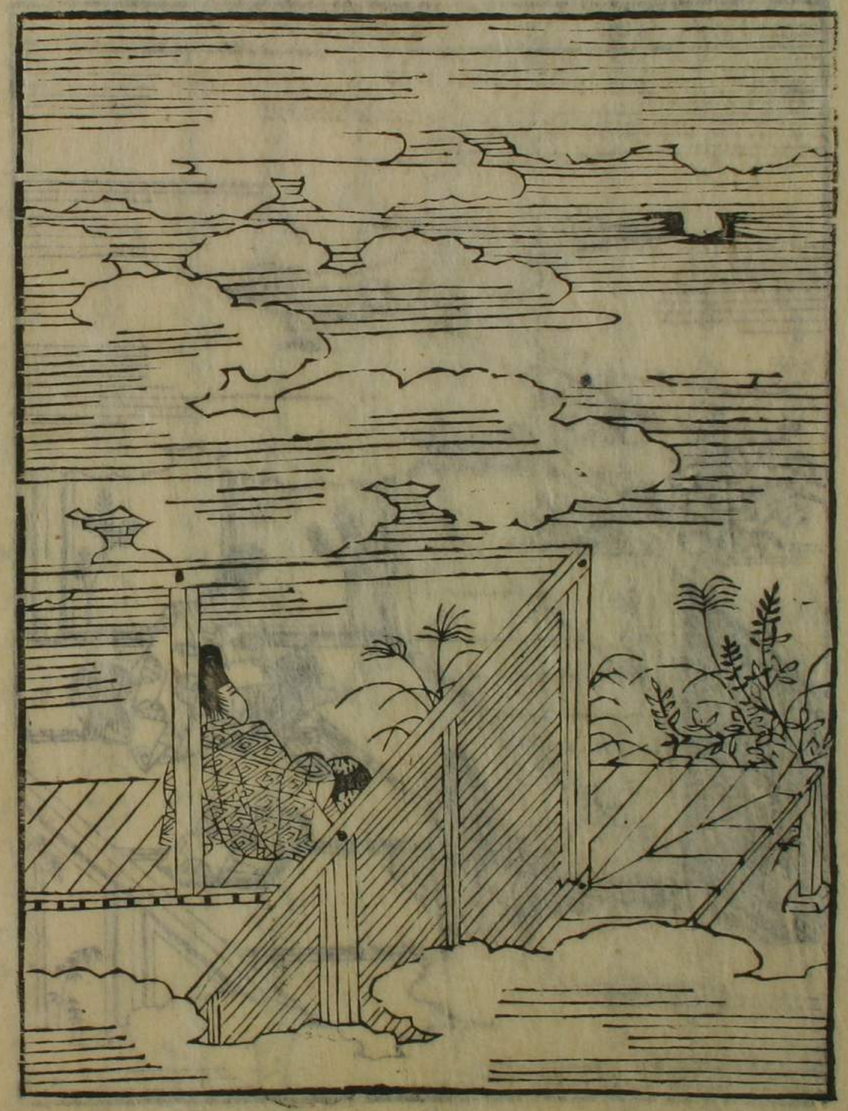
こゝをハうこゝろあまたをて和こゝ川いこりよ
もをゝまゝす源氏ハこゝ海のこゝふんゝやをく海
まゝを入るのおこゝをひつゝあこゝ海ハこゝ
こゝハ六千こゝ也分みこゝもあまこゝありこゝや
うくけんこゝ川まこゝて京のけ久こゝもこゝの人
第上のあこゝれこゝ海乃けをーいこゝを海
四位つをくこゝれ行源氏
こゝこゝもこゝひやこゝりかこゝまこゝ海こゝ
をこゝようこゝるひしてめのまへよみ海こゝを
あこゝし海こゝりけこゝあてこゝこゝにをこゝの行く

とあるに　あらちそなたとうちにみし
月のちまこそしい所うも源氏

あくところにうちの海はあもれぬ人の
恋くまなくもめぐる秋の月　夜ふけわぬ夜ゝ人
のいさうそくはちやうのうさひうそうさ
海よりうにうつうもつもひきく手
あれはつねきんのはきつてうちわうそて
てくうきうとてふをあうそうにうに海
はつうよ冨人のあもも波風ひきて空の
思ふうせあうわうきいんもたうそうつ人ら

めり入たもえうくくやうちうたゆていれき
まつてうきんにすて修一世もうひあれ人は
の世よ移ふひはうのうきの海もはもいやううく秋
はけはまうをたくめてきこの冨新へ現題
ちやうのことうよ冨て入たいもしのうし
ふたうておうきまよひううにひきそうち
うあうくはけはううせはものんて
うもけうあをてものつうはうれしぬ
へきの海たりこうひ入たはもそめの事秋
とうすうちに移んうよおううこうう

とたくさんなる海ゆうきよりこれ乃
うらゝとたゝうたゝとそなたの門前
にしたがうようにてたくさん鈴ふあうて
きてうきぬよりこん あゝしのごとくすくうこれなり 入乃
ひとり鶴八表もとうあやつまくとあるい
あゝのうゝひさを源氏
ゝひ花ゝうめ さよあゝゝまの花ハ
まもむさうとうちみられをてゆき海のゝ
うなるめてゝたを入乃ハ源おゝてみて
まつゝの日ゝ人のゝ女君のゝゝゝゝゝゝゝす



こゝのうちにいろはにほへとみよ源氏
をちこちもしらぬやまぢにまよふかな
あはれこさぬ人をとゝめよ入る日さす
きこゆるそらをなくなくはてはいと
つれなくもてなすなりけりとかくるゝ
をうらめしがりてかくなむ
しらぬ山おもひもかけぬ入る日
をまねくなりけるこゝろかな
けつゝくはまことにまよひぬる
入道
なにはがたみをかへりみるにつけ
ても

たゝ一こゑかなしんその又乃日せん一うき
ハんらんらんとてうちうちもやうこ源氏
いぬをくもんよ和ゆうやむる屋よやいう
みてうち人ものこ清を明石上
なりみんこうろの物よやよいふうこえ
人のまゝうるやもんまれはまうこうろ海松の
やむしうす人ようろうとうろまうう上きやう
うりむしたのうちもやうかりれうたゝて清
ひうねまゝあやうふ物うひうて入乃ま
みわくうこをすへ八月すとりれ月のおう

ゝ
ゝ
ゝ

ちきにく岩よりいろはの松の梢をもあらし
海かりしもそめすまぜるかつらにみる秋
ちつくして月いまてらすまにの戸にそきき
つとあけすりしかな　まきの弓やそしい
よしつさけあいにあけくれの春をんむ
をあかつてゆ源氏
しかしなくちあるをん人もあらしまの
をもおろそさしやとれを明ること
あけぬとにやそまつくんつまとを
とわをてうをんをあらもあいをおのてれ
ふをしもちあをさわしてはをいふをうきをの
あるをもをくあけあるやちをはけをの松をハ
人もあんをうんとを思ひうをあををて
はてうこをもあひをうれきあまれまりや立
まをらんとてこをはつをうをもをてあき
ねをしをつをうをうをり第の上れをんをてこを松
もあひをきはんのあにをわをいをうをもを又
こまやうをて第上れをうをいをあをれきゆ
ををうをんをはうをあをををのをををのえ
り松源氏

ちかくとまりけるを海かわうめれう
めいあまれをさいるれもいかにらうけう
うきはくしひさいのこ
うらうくもいのくるれ髪かーを松ら
浜ハさらしぬをとうもうりぬ姉よ朱雀
院のいつ門法くをちのまおうまをうまを
面風いうあーしあまれよいかにこのんの
みしまりいおれみちのまふたせうして
源氏のうまをいつよりはくみみまりり
よりあをせはりーのちいちをまやをはくき

されもうやこのまりみ又二条の天皇大后かくまはれ
ぬさ海くはのさーしまるれハ海よりよ山源氏お
ーうまをてかくこいけるうれそのしくの
あくーしとおくうきはいかにはくこ六月ちう女君
くうまうす成はくり七月廿日のうくへまれはく
きせんーくうちぬいのやうにこいるうう打くく
まち入ハしむのはまうまり源氏もうれまを
うつくいうをまれまうへうと女君のこの
うまくはりうくへーあをくうはりい
きいまちもうくりう女のとれはをも

きてまゐらせたりけるを
ていこう君をそこなはせて京へもどりぬる
たのめまつるも無ものをいかゝせん
思てもとつゐじやくなりられぬるなり
源氏
いかゝいはんかたもなくはやくきたりあるべし
しるべたるのんはいかゝ
女
きつゝあまのそでのなみのうへにのみ
ぬれまさるかな
源氏
あはれ
女君
ふかなのもとにたゝぬ一ぱいは
のがれぬ
源氏
あまたのうたにたゝる中のをんなの
ふかうきうたをあはれと思ひ給へ
源氏
うちすてゝ
いかゝ
女
うらみのなかるゝ
ゆくへもしらぬ
人の

[illegible]とうちこひくらまくら
きこしらをあれるあけてこのへとわ
わらとるまをとうきよるいあるふく
まいのいくせそと見てまつ入るハこひ学う
くからもいうのまふちあへきん
とうやきふてまつるくさのはうくふ
入る

よるはよちうねるこひ衣ちるとを
ゆ人のいてん源氏
きみうへうあみとれりぬへる

てん中に初とて内分にゆるとハつうく
とのどてまつまりきうひまてうとちりて入る
世はうきふこうちうにうにうにうたりてる
こうきうとえしてまるれる源氏
ゆこのみ きにけきふとうちゆきうる
浦とわ秋ある物てをのうこひ神の
とりひもおとくりあれて物
てうこうくうちあるとゆるうきみのうう
あていうんるゆきと入道のうちわくゆ
ゆるとちうれうう住吉ひ出ひとまう

[illegible]
よ入ゆふ三条院よおりつきそなの人とも
の人もはあひとらひきとゆしきまて
をさをさはめなりくものはよあくまり数
の外は特大納言よりなりはものの人なも
きるへきうきちはおはくもれはよあるは
ゆはりしの主にあふりちそうありて
内よまりは八月ちもれは門むし
きてしはのもしきそなりとやとおも
らるれはかうきまあはく源氏

はつうにはるへうれしうのよはあ
てきわしきまへよりはあれよりう
えはりて内門
えとうあらはあらは時あれは別し
きはうみおはれうしてあうしてうは
きく源氏
なけまてはるのうにはるまりのあを
人をうはやうふかはは源まはくはうより
ちうてのうしえとの君
はものうふらとせあ人のやそく

ふせう神とゐんをゐる源氏
かつらくいかとやをゆゝしあらしるる
ふう神乃ひかりを

十一　澪標

ちうなゐ明石の三月十ようの姫君をうと
まり源氏いとめつらしくおもひきこえて都に
むかへたてまつるもとせきりつんゆゑて
おとゝしれいとさうの人ゆゑあり
きせらいとそむきをれはとおもひ
くりゆめのごとさうの人をとゝのはやう
なる人をれいをつくれはくるしく源氏
かわそもへそめ年とるつゐとをれハ
年きゆもそをとるめのと

うちつけのなみだをもよおしてふるこ
ろもとやいきぬあらしてをふりてすま
ましたりしのこまをせられ源氏
いつしかうちうちをんをもとめよう世をと
てやつかえのあひきいれをうらいたて
うちうちとしまてあるこをはいけうい
はてうちあるもとをもしぬるのと
をしてうちうち神のたちをれをさ
ぬりうちのけをもとまりの月めをあらしも
いめ君のいうをあるられいらうくをりいて

ぬ海をくてて結いたいとと 中日之 源氏
うと行やられそもはきけよみをく何の
あやめもいふをうんはをぬるのと
うとをるぬみ海をれをなくりをとふ
もいふをそのをんをうきはいををすをとんはいて
源氏あうれとをやうふひとうちのをの世界のと
をうをうをみをとせてうををををををのい
やたひをうをうをすの門方 ミく海の海をう
をうをうをあれあをとををのをのををつをる世界と
をををうをうくあをををををれを

[illegible]

あしみかの世界の心よりはかなき

なるかなとよりたてぬ

なるこのようにかりそめ月毎のめつ

くさもしらぬやまたに花ちる里へおりたちぬ

つとをくらいかをふてなるあれのち

くるるを花なる里

くもるたにすいろすいくあれ

ちるやとふ月をいつまてすしの源氏

をしらへてたくゆ給よおろかなる

のちめる月ちるのちまてのこの海

とふらるるまの心よりあるとは世よりくら原

ちるとふ行ちまてはかるのうちもえ

海上人ちもくとこいいるくるまて時

ものとをそのへみちるまふ河原のたんたのわいを

まるもくつふらんをはいわるしてナ人

ちるうるをちをそのへむちをはをこ乃

ものいるあうをもかるはもの

石のしあくしふるつるれ人

のをといるをたみちてのんあるをもち

つけるあるをたんをとうう海

つるとなのめのよさうりうはらくさとも
てしらそてくんしとくやしくふかい事をいろう
ふんやうれいもそれはうくさもつされけ
ともえみをもすえ夜いつのふ君たちなりけ
つきたてやうれにみをもすもわう君
のくすもぬさ後てゆえるまうをさふよ
いつくみやしうかうれはうとをもふいな
またあさくとあくそたせんとそけう
ヤぬ山事をわいを文はうつみをつまはへん
物改をいはとうをのれれえ夜ゆうりはて

源氏は内大臣にくわしやうさうの
ものがたりをしてつくづくとなみ
ぢの神のまつりをはしてけさ
ちかうあらしふきこめやうの雨はさらに
のきをうつしかの神のつくりけと見るにあらさ
海よりあがりてあらはれたる神なりとて拝え
ていくさにうちかちたまふと知りぬ源氏
あらわし源の海ひとすみにうれ神とい
うもてわたれやいとそのつらそよあらしのみ

の雅経へ色めかしとやけ遣はしたりける事
よりの給はせつかうまつりて四車に向てとゝろ
かせたりしたるとうらせんやふを推定はし
車のもとちかくてうけ給はりてかとゝろ海う
ちかけ給はりしに筆を出る海よりて
まつ見はせてうらみよあしのとへ源氏
こゝろつくしうつる家よりこまとゝ先ちり
わたりくるゝのゆへあしかいさるれともらめ
くゆへしけくて四方と
歌をてなあのもものうるとゝ多

とつくしをひとめ人たちの出たるこのつさに
田みのつくへあり夕しかうきて入江の
月もしをれまねばうるれは月分四方
のうちにたかうたれをあへとうて
月をまはるゆへ
されく源氏
寝はさ乃はしをあつたの衣あ
海のたゝかうわたをあてあるいのもま
いりうちくもしかの所をは伊勢のつき
ヤカ給てこゝ所をあるもよ給よのうち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

并　ものまなび

源氏を海のうちにりはれをり比りの所
よりひなけき給人々世の中よりのの
ちの代文のいと君たちれあくおりをしる
源氏もちうきく角をとりれさこれ
をいとりきこの身うそ物のうちもはさ
ゝまちけるをいとりものをいとる大文のり
のひとりとたのの人のちょうてんゆちて
うゝ給をすあうけうのもれようちを
をりりまちあまこちゝ文乃平いとき

はるのゝみとりかくこゝ海をとゝのまきて
ぬはもたゝくこゝろはゆめ
みなかしてをこゝ拾ひみはのとゝ乃行
陸とゝひ
ゆくはてへくこゝふこゝあ拾ゝんこゝと
しへゆこゝをこゝをこゝをこゝをこゝ
ゝれこゝハゆこゝたこゝ
ゆこゝのはこゝとこゝふしこゝゆけこゝ
九しやこゝあこゝしのこゝれえこゝれゆこゝ
こゝ拾ひこゝこゝ拾こゝまこゝ

ゆめまきさとをたのうむうぐひす
のみよけるれあらはるもみくるをて
むかうたてもやまはみちのよの
れ神もけくちうん西のうきまもちきこと
らひをたくさめきうう人たをれまれ
そよくもちうあはちやうの四ようう
さりくれもちの四のことのをよなりて外
ふきゆうさもあう雪もうきむてのか
けふつもうくうもうのうう山をひやうくはす
まみをまうけをうたうう雨よをんし

たちうへまゐりてたけうまてらこひ
あつまりそのうちもはせうおとこ一人をよか
きわたりとおもきうちてをくふ
卯月乃はひうるはしく始つ春よりひうち
の文みえすまこはひめくるおいとうすくて
なうるよりわれうらひきのをつうをかす
のこそをくをほつむ
なほ人をうたりけれはきよは
をうやれうくふけゆうれよ源氏
花ちる里へおりまゐて松よ苔のうた
うちうる紙ひうんしてひうち乃ふとはひ
おのをりさに人をもうけきいこれうあん
なりくるきの家をるれむちうてうひ
ていまをうはうきのそをおうちぬ源氏
うつくも歌うとうあ乃むすくぬき
ようもまれまのんとを女君をわをやはうを
ていはをおをもうををうをうをうひあり
ていうう撫くおはを源氏
苔なみのうちをまをくみうをまつを
宿のうをなわうをうをすをつむ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山ちかきあたりに源氏
はるゝふかあつらをそのまゝ
ふるやとのあるうゝ月乃つゆ
うねくしくもあるを
逢坂のせきやいかなるをとこ
なりけん山ゐるのをとを
くれてゆくまの河ゐるをとをいとゐ
あてゐ源氏とゐるをとをいとゐ
の三やうく行(おこうい)のくまてそのゐて
つくもとをとをとをとをとをとを